

江戸期なごやアトラス

資料を探していて、たまたま表題の報告書(名古屋市、1998年)を見つけた。古地図に関心があるので、興味深く目をとおした。

江戸期、尾張名古屋には、すぐれた地誌、絵図、図会が残されている。地誌とは寛文12年(1672)の『寛文村々覚書』、および文政5年(1822)完成の『尾張徇行記』であり、絵図とは天保12年(1841)の『尾張国町村絵図』(村絵図)、同時期天保年間(1830-44)の尾張志付図としての各「郡図」、そして図会とは天保15年(1844)の『尾張名所図会』(名所図会)を指す。これらがほぼ全域にそろって残されているところに、同時代日本の他地域ではみられない地域研究の対象地としての強みがある。つまり、尾張名古屋は1村域を超えた広域の景観復元とその変化を考察できる絶好のフィールドなのである。

江戸期名古屋の誕生は「清須越し」に始まった。これは清洲の低湿地から熱田台地への移動である。その一方で人は海に向かった。膨大な干拓地の造りがそれを物語っている。名古屋市域の西半分が沖積平野の低湿地、東半分が洪積台地・丘陵地の乾燥地であり、その両者において、先人は片や自然堤防上の微高地に居を構え、片や平野と丘陵の境に集落を形成してきた。自然を利用する知恵、自然に挑戦する勇気、この両者を兼ね備えて名古屋の社会と経済、文化と景観が創造されてきたのである。

2つの地図だけ紹介したい。左は江戸期の末森村(1841)。村の東部の大部分は山林とため池。その間の谷に水田、集落が展開。猫ヶ洞池、名大

近くの鏡池も確認できる。ここは、現在の本山から東山公園あたりであり、わが家にも近く、いつもの散歩コースだ。

その左は「今池」。古井村と呼ばれていた一帯であるが、今池という地名が、現在の市立今池中学校付近にあった「今池」に由来することが見てとれる。池の上に建つ今池中学校は、災害時の避難場所として大丈夫なのだろうか。いろいろ考えさせられる。

(2017年1月29日)

